

Title	巻頭言 タイガーマスクと福祉のコナンドラム
Author(s)	郡司, 篤晃
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-No.5 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2894
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭言

タイガーマスクと福祉のコナンドラム

ついこの間、児童福祉施設などに突然の伊達直人と名乗る者から寄贈が置かれる「タイガーマスク」現象が広がった。最近どうなったか、殆ど報道されなくなったが、すべての都道府県で、1000件にも及ぶ寄付が寄せられた。

タイガーマスクとは、梶原一騎原作のプロレス漫画の主人公で、プロレスラーの伊達直人である。孤児院出身の主人公は、喧嘩が強いことから、プロレスグループにスカウトされトレーニングを受けるが、そのグループは反則をもいとわない悪いレスラーのグループだった。主人公は次第に正統なプロレスラーになりたいと思うようになり、自分を育てた集団と対立、刺客を放たれ、死闘を繰り返す。また、孤児院などに寄付をするようになり、最後は、自動車事故に会いそうになった子供を助けようとして事故死するが、その事故とタイガーマスクの突然の失踪は結び付けられることはなかった。

ジャーナリズムは、この流行に驚きと関心を示し、テレビのニュース番組でも寄付をもらった施設の人の驚きと喜びとともに、頻繁に報道されていた。

一方、評論家なる人々の発言も盛んに報道されるようになった。「本来、日本人の心に潜在する優しさが共感をもたらしている」。「寄付文化の乏しい日本に、その定着を期待させるきわめて啓蒙的な行為である」という。ある評論家は「匿名性が面白いからではないか」、ジャーナリズムに報道されると、「あれは実は私がやったのだ」という優越感・満足感からであって、一過性で長続きはしないだろうという。

ケア政策に関心がある筆者としては、この流行が悪いこととは思わないが、これで寄付文化が定着するとも思わないし、寄付に頼る社会保障制度をよいとも思わない。

民主主義国家は無産国家であり、今や国家の支出予算の四分の一が社会保障費用、つまり助け合いの費用であり、これを毎年集めなければならない。これと殆ど同額を、国債という借金の返済にあてなければならないので、国の会計は膨大な赤字であり、ランドセルの程度ではまかなえない。ところが、国民も政治家も、消費税を5%から10%にすることさえやろうとしない。ヨーロッパをはじめ、殆どの国で20%を越える水準になっているにもかかわらず、である。大衆民主主義社会では「政府は失敗する」という呪いのような公共選択学の理論が、わが国ではまさに現実になっている。

わが国では、社会保障、特にケアの受益者への給付が貧しいだけでなく、その働き手も貧しさを余儀なくされている。ケアは利他的な行為であり、ボランティアが重要だといわれる。例えば、高齢者を介護する人はボランティアであり、それは無償の奉仕であるべきだという主張がある。ある有力な介護NPO法人は、そう主張して、介護者に「給与」ではなく「謝礼」として最低賃金以下の金額を手渡していた。

利他的行為には、定義上、また実際にもある程度の自己犠牲を伴う。また、金銭や命令など、外的な動機は利他という内的動機を締め出し（crowd-out）てしまう。しかし、そうだとすると職業としての介護や福祉は最低賃金も保障されないのだろうか？それは搾取ではないか？福祉従事者は自宅を持つことはあきらめなければならないのだろうか？市場経済の社会において、つまり利己的動機を基本とする社会において、この利他的な行為をどのように定着させれば良いのだろうか？

み心が天に成るごとく、地にもならせるためにはどうしたら良いのだろうか？これが人間福祉政策に課せられた難問（conundrum）である。

聖学院大学は人間福祉学部を持ち、「人に仕える」人々を世に送り出している。聖学院大学総合研究所は、一刻も早くこの難問に答える「新しい共同体理論」を形成しなければならない。